

著作物の明細】

- | | |
|-----------------------------|--|
| 1、題名 | 連掛虎ノ巻 |
| 2、著作者の氏名 | 遠藤幸助 |
| 3、最初の公表年月日 | 平成22年11月12日 |
| 4、著作物の種類 | 論文 |
| 5、著作物の内容 | メバル釣り場、生態、食性などを釣り人の視点で観察し解説したもの。
それを基にメバル釣りについて道具、釣り方などについて解説した著作物。 |
| 6、この著作物を無断で掲載、転用、複製する事を禁ずる。 | |

連掛虎ノ巻

2章 釣り人から見た生態

ここではメバルの生態について考えます。ただし水中を映像で観察した訳では無いので推測の部分も有りますが、実釣を重ね魚探の反応やメバルの釣れ方から感じた事を説明します。メバルの生態を知り、連掛け釣法の極意 其の2「**8連ルアーを群れと化す。**」 其の3「**先頭を掛け図にして群れを引き付ける。**」を実践して下さい。

1、食性

まずはメバルの体を観察して見ます。図6を見て下さい。全体は丸みを帯びた流線型で断面は扁平です。背鰭、胸鰭、腹鰭、尻鰭は体長に比較して良く発達しています。尾鰭はウチワの様に丸い形状です。岩礁に住む同科のカサゴと比べるとスマートで泳ぎ易い体形ですが、鯛の様に中央が切れ込んだ尾鰭や大きなエラを持たないので、速く泳いだり長時間泳ぐのに適した体形では有りません。眼は大きく発達しており視覚に頼る行動が多いものと思われます。図7では大きく開いた口の様子が映っています。上下の顎の内側に細かいヤスリ状の歯が有ります。硬い物や餌を噛み砕いて食べる歯は無く、柔らかく丸のみ出来る餌を食べている様です。冬～春にかけて釣れるメバルの胃内からはアミエビ、イカナゴ、クラゲが見られ、また 10mm 以下の小生物や半消化状態で判別出来ない物も多く出て来ます。しかし蟹や貝などの殻を見た事は無く岩礁に定着した生物は食べない様です。これらの事から推察すると、メバルは身を隠す場所として岩礁に住み着き、海中を流れて来る小魚や動物プランクトンを岩礁周辺の近距離を遊泳し捕食していると思われます。また大きな眼は稚魚や動物プランクトンなどの小さな餌を見つけるのにも生かされていると思います。



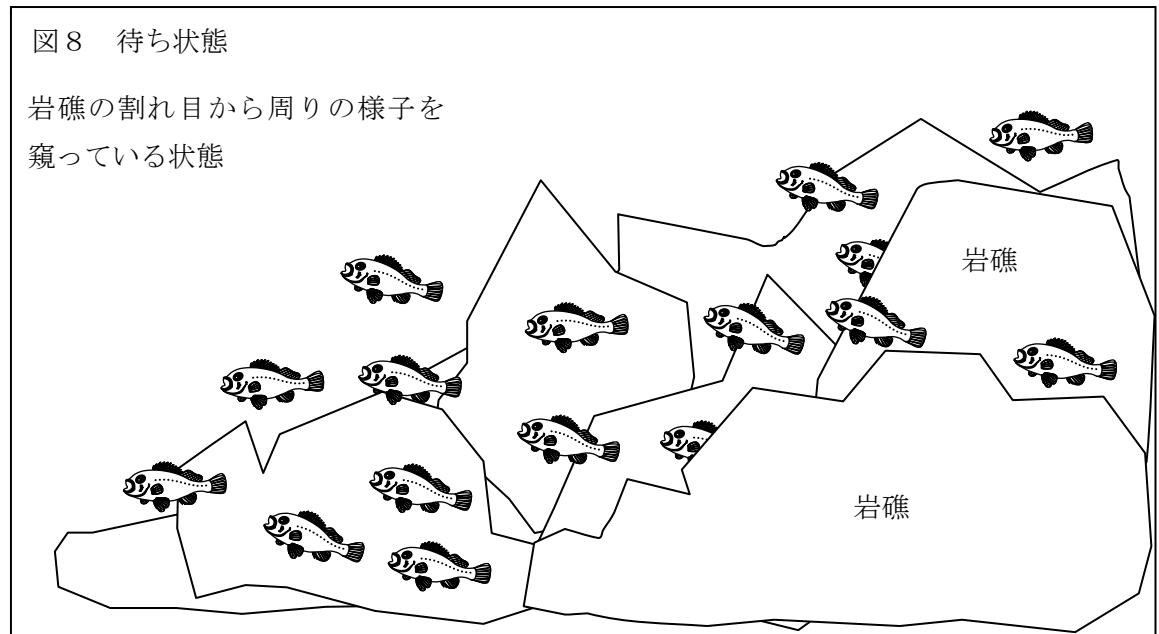
2、群れの状態と習性

船釣りでは同じポイントでも良く釣れる時と殆ど釣れない時と極短に差が付く事が普通です。釣れる時は必ず魚探に群れが映り、魚影が映ら無い時は殆ど釣れません。魚探では岩礁や漁礁の中に隠れた魚は映りませんが、岩礁の中から出ている時の群れの状態はその特徴により幾つかに分類する事が出来ます。

連掛虎ノ巻

(1) 待ち状態

岩礁から高さ 1m 程度の範囲に薄い魚影が映る時は、岩礁から周りの様子を窺っている様な状態です。図 8 に待ち状態の様子を表しました。船で近付くと岩礁に隠れ次第に魚影が消えたりします。警戒心が強くサビキに騙され難く、メバルが浮いて無いので連掛けを狙うのは難しい状態です。ポツポツ 1、2 匹ずつ釣れ型も小中型で大型はあまり釣れません。

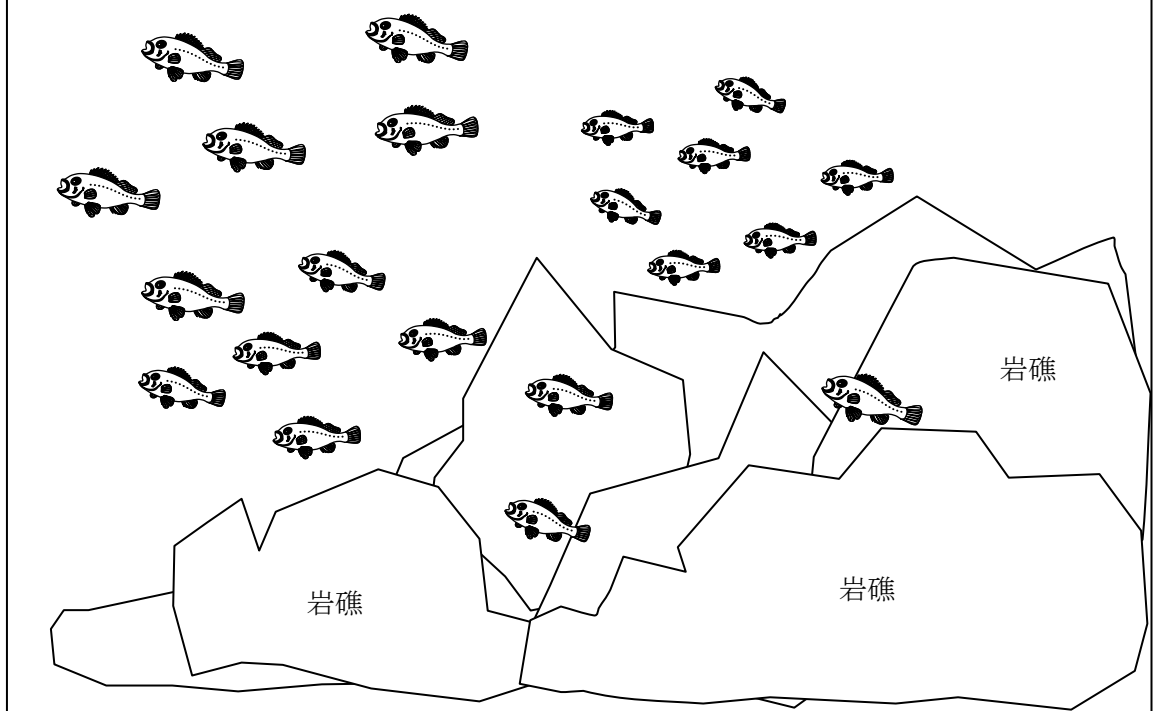


(2) 探し状態

岩礁から高さ 5m 程度の範囲に中程度の魚影が広く映る時は、岩礁から出て餌を探している様な状態です。図 9 に探し状態の様子を表しました。誘い方が難しく、サビキを咥えても吐き出す様な空当たりが有ります。しかし上手く一匹目を騙す事が出来れば連掛けを狙う事が出来、小中型に大型も混じります。群れは冷静な状態なので根掛で仕掛けをシャクルなど、驚かせると岩礁に隠れ魚影が消えます。反面、大勢で連掛けをすると競り状態にさせる事も可能で、釣り人の腕で釣果に大きな差が出ます。探し状態の様子は波止場や浮き桟橋などで観察する事が出来ます。小さなメバルが群れで海中をゆっくりと泳ぎながら、人には見えない小さな物を食べています。時々 口に入れた物を吐きだしクルクル眼回している様子がうかがえます。探し状態では海中を凝視し餌を探している様で、きっと船の下でも同じ事をしているのでしょう。岩礁から出ている時、大きいメバルほど上に居る傾向が有ります。また大型のメバルと小型のメバルは別の群れを作り泳いで居ます。

連掛虎ノ巻

図9 探し状態 波止場の観察や魚探の映像からすると、この様な状態で漂う様にユックリ泳いでいる。大型と小型は別の群れを作る。



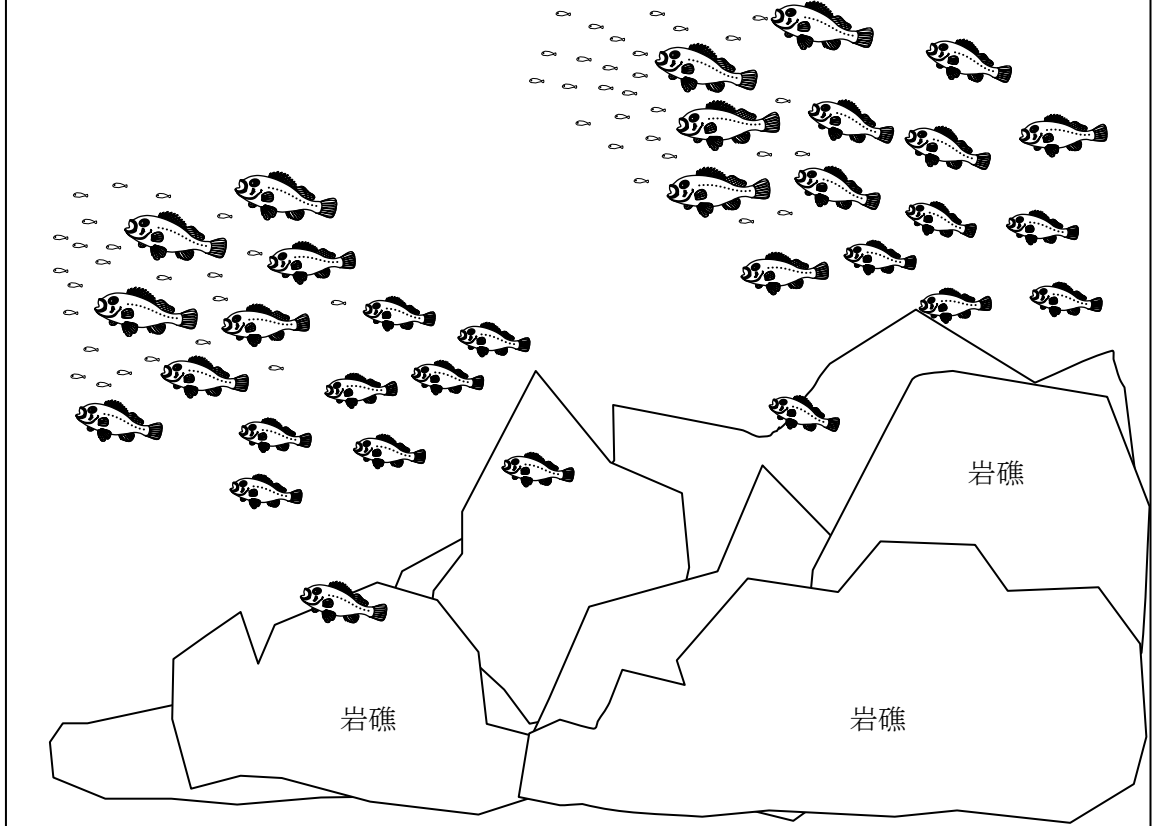
(3) 競り状態

岩礁から高さ 10m 時には 15~20m の範囲に個体が解る強い反応で群れが映り、また塊で動きまわる群れが幾つも映る時は、餌を追い興奮して競り合っている時です。図 10 に競り状態の様子を表しました。サビキにも良く反応し連掛けを狙う好機で、群れの前方や上部に大型がいます。同じ棚で待つのでは無く、メバルの動く範囲を広く探る必要があります。待ち状態や探し状態の時、餌が流れて来ると競り状態に成ります。餌が居なくなり競り状態が冷めたり、雑な釣り方で警戒されてしまうと以前の状態では無く、岩礁に戻り魚影が消えます。朝夕のまづめ時や夜釣りでメバルの群れが、水面を跳ねている時がまさに競り状態です。競り状態の時は大型の群れほど高く浮いたり、岩礁の前方に出ます。また同じ群れなら上部や前方に大きいメバルがいます。

連掛虎ノ巻

図 1 0 競り状態

魚探の映像からすると群れを作り、餌を追い泳ぎ回っている。
群れの上部や前方に大型が居る。

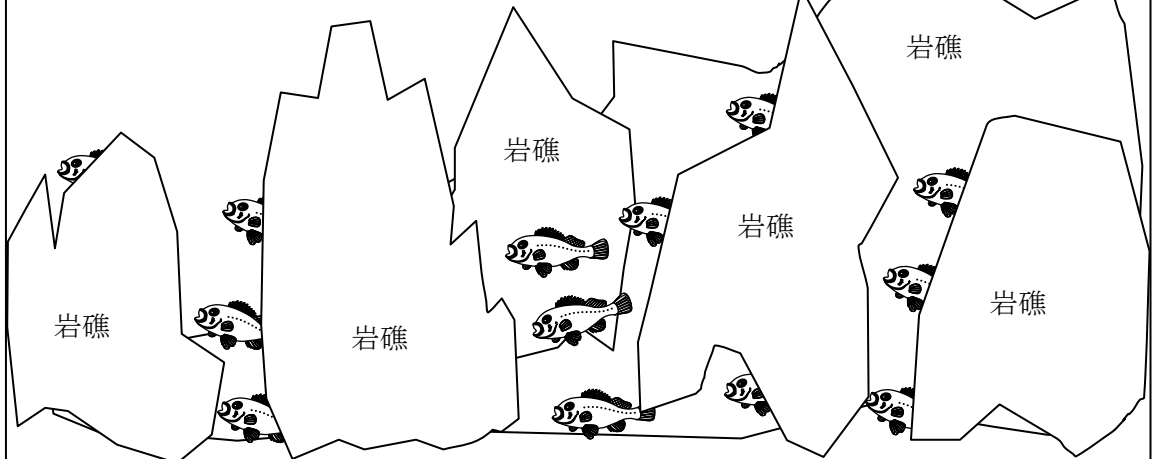


(4) 休み状態

岩礁の中に居る時メバルの状態は魚探では解りません。しかしメバルが居るはずの好ポイントでも魚探に反応が無ければ、いくら岩礁の割れ目や漁礁の内部でメバルの居るはずの場所に仕掛けを入れてもメバルは先ず釣れません。この様に岩礁に隠れている時は餌に興味を示さない、休み状態に有ると思われます。図 1 1 に休み状態を表しました。

図 1 1 休み状態

岩礁の割れ目に入り休んでいる状態



連掛虎ノ巻

3、船釣りでの好条件

船釣りでの好条件として必要なのは1天候、2餌、3潮回り、の順です。このうち天候、餌は特に冬季の釣りでは運任せで釣り人が選ぶのは困難ですが、通っていれば必ず好機は訪れます。潮回りは釣り人が選ぶ事が出来ませんが、芸予諸島には沢山のポイントがあり当日の潮回りに合った場所を選び出船するのでそれほど重要では有りません。

(1) 天候

春告魚風と言われる様に風がなく穏やかな日が好条件で、大きな群れが浮いた状態に成る事が有ります。反面、船が目立ちメバルに警戒され易く静かに釣る必要が有ります。風で波の有る日は幾らか船が紛れる様になりますが、時化の日は風の日ほどの大きな群れになりません。



図1 2 風の日

穏やかな風の日にはメバルが良く浮き上がります。こんな日は連掛けの好機、期待が膨らみます。



図1 3 時化の日

冬の北西風は試練ですが、風裏のポイントで粘って得た釣果も嬉しい物です。

(2) 餌

メバルの住処に餌が来ている時は多少天候や潮が悪くても、メバルが群れて浮いており、また餌を追って競り状態に成っているのが千載一遇の好機です。

図1 4、寒さも緩む3月、イカナゴの新子を追っている群れに当たると、丸々と太ったメバルが連で上がって来ます。



図1 4

迷掛虎ノ巻

(3) 潮回り

大潮の良いポイント、小潮の良いポイント、場所により様々ですが緩めの潮が安定して流れる時が、好条件で群れが浮いた状態に成り易いです。



図15 大潮の日

大潮で激流渦巻く場所には荒い岩礁があります。



図16 小潮の日

小潮になり流れが緩くなると岩礁からメバルが餌を探しに出て来ます。